

## はじめに～一からはじめる連歌～

連歌といえば、やたらとルールがきびしくて何だか取っ付きにくいと思われる方も多いでしょう。どんなものだろうと連歌関係の本を読んでみたが、いろいろあって訳がわからないと投げ出した方もおられるかもしれませんね。でも、その難しいと思われる連歌を楽しんでいるグループが今全国にひろがっています。確かに難しい面もありますが、やっているとその面白さはまってしまうという人は多いのです。これはやらないと分からない面白さといえるかも知れません。まずはやってみる事です。

これで、ちゃんとしたルールなどは後から覚えるとして、どのように始めればいいのかアドバイスをしましょう。

### 1 親しい友だち二、三人で始めよう

まず、五七五と七七を交互に詠み継いでいくこと、これは大前提です。連歌は大和言葉（百人一首で使われているような言葉）が基本ですが、当初はあまり気にしなくていいです。親しい友だち、二人か三人で始めるといいでしょう。最初に五七五を詠みますが、美しい景色をみて「ちょっと俳句でもひねろうか」と思ったことがあるでしょう。そんな気軽な気持ちでどうぞ。はじめた場所と季節がわかるように詠んでおくと、あの時始めたんだ、とあとで句を見ただけで分かりますからいいかもしれませんね。次の人が七七を付けます。さらに次の人がまた五七五を付けます。最初の五七五・七七と次の七七・五七五は同じ七七の句を使うこととなりますので少し工夫がいらいます。

### 2 絵を描き加える

その付け方は絵を描くことを考えればいいでしょう。前句が（A）船の句であるすれば、それにどんな絵を描き加えるか。（a）海の絵を描くこともできます。またちがう人だと（b）風の絵を描くかもしれません。（c）飛ぶ鳥を描く人もいるでしょう。どの句も船の絵にあわせると、（a）海原を進む船（b）帆に風を受ける船（c）船の周りを飛ぶ鴟といったひとつの絵が出来上がります。どれでも正解です。一つの絵を見ても百人いれば百人それぞれの絵を付け加えることができます。ただし、出来上がった絵がちゃんとした一枚の絵として成立していることが大事です。船の絵に（d）砂漠の絵を描き加えても、これはちょっと絵にはなりませんね。次に大事なのは（c）飛ぶ鳥が七七で詠まれたとします。この絵に次の五七五を付けますが、ここでは最初の（A）船の絵が消えているということが大事です。船（五七五）の周りを飛ぶ鴟（五七五・七七）に新しい新しい絵を描き加えることです。たとえば（e）夕暮れの山を描けば、この鳥は山のねぐらに帰る鳥（からす）の絵となるでしょう。最初の船の絵とは全く関係のない絵になります。今度は（e）に（f）鐘の音を詠めば、山寺から聞こえる入相（夕暮れ）の鐘というぐあいに場面がどんどん変わっていくことが大事です。最初、（a）海の絵も正解ですよといいましたが、場面の展開

という意味では少し付け過ぎということになります。なぜなら、海の絵に次の人は何を付けるでしょう。(g) 魚でしょうか。じゃ魚には(h) 釣り人。こう考えれば先程の鳥の絵に比べて場面が少しも動いていないことが分かります。あまりにも近い付では場面の展開が難しいのです。そう、どう展開させるか、と考えながら付けていってください。

最初ですから、まあ八句ぐらいできたら完成ということにしましょう。その八句のなかには是非ひとつ、花の句か月の句を入れておくといいでしょう。連歌でいう花は桜のことです。桜といわずに花とittedだけで桜を詠むことになります。そんなことを二、三回やってみれば、その度に趣の違った作品が出来上がり、また友達の意外な面を発見したりして、それも連歌の面白さと気づくでしょう。

### 3 季節の移り変わり

少し慣れたでしょうか。では次の作品は二十二句(半世吉)を目ざしましょう。メンバーは同じ三人でかまいませんし、もう一人か二人誘ってみるのもいいでしょう。

花＝桜は春の季語ですね。月はそれだけで秋の季語になっています。月は秋だけとは限りませんが、「月」といえば、秋。「虫」も蜘蛛や蝶など夏や春の虫もいますが、単に「虫」といえば秋に鳴くコオロギや鈴虫のことでやはり秋の季語です。これは俳句でも使われている季語の約束です。手許に簡単な季語集や歳時記を置いておくに参考になります。

さて、せっかく二十二句も詠むのですから春・夏・秋・冬の四季の句を詠み込みたいですね。順番は季語通りでなくてもいいです。季節通りに詠む事にすると、何回何十回作っても同じパターンになってしまいます。連歌では秋のあとに春がきてもいいのです。ただし、秋の景色に春の様子を描いても絵にはなりません。春の句に夏の句をすぐ付けてもそうですね。そこで、(h) 山の紅葉という句に(i) 散歩する二人という句を付けます。紅葉を見に来た友達同士という絵になりますね。散歩する二人には季語がありませんので無季の句となります。これを雑(ぞう)の句といいます。そして、その(i)に(j) 春雨の句を付けると、春雨に濡れて行く恋人たちの絵になるというわけです。秋・雑・春とすることで、絵がスムーズに展開していきます。なかでも、春と秋は日本人が好んだ季節ですので、一度春や秋が詠まれると三句は続けます。春・春・春・雑・冬という具合です。今度は、はじめの八句までに月の句を、二十二句の内に花の句を必ず入れるようにしてください。また、冬の句の時は雪を一度は詠んでください。これも何回か練習しておくといいでしょう。

### 4 世界のすべてを

さあ、世吉(よよし)に挑戦です。世吉とは四十四句で作品を完成させる連歌です。これまでにやってきた場面の転換、季節の移り変わりは大前提です。また、連歌の基本である大和言葉も少し意識しておくといいでしょう。もう少し仲間が増えるといいですね。新しい友達には今まで学んできたことをやさしく教えてあげましょう。

さて、これまでの練習で分かったように誰もがどんな作品になるのか出来上がるまで分からないのが連歌です。というより作品自体にひとつのテーマはありません。そのかわりに連歌では世の中のありとあらゆるものに関心を払います。人が一生で出会うさまざまな事柄を句のなかで表現していくのです。恋をしたり親に死に別れたり、悲しみや喜びをいろんなことで経験しますね。自然も美しいだけでなく、時には恐怖の対象になるかもしれません。もちろん四十四句でそのすべてが詠み込めるわけではありません。二回目、三回目には前に出しそびれた事柄も詠んでみましょう。

## 5 連歌のルール=式目に挑戦

これからは、大和言葉を使うことも念頭においてください。漢字の音読みが漢音なら、大和言葉は訓読みの言葉遣いです。

本当の式目は第一部第三章で細かな解説がありますので、それに則って作るようになりますが、ここでは二つだけの式目を覚えてください。それは連続と制限の約束です。

A 連続の法則 春・秋は 一度出ると三句連続して詠まなければならないが、五句以上は続けられない。

夏・冬は 一句でやめてもいいし 続けるなら三句まで可能。

恋の句は 二句は続けなければならないが五句以上は連続できない。

B 制限の法則 同季七句去り 同じ季節すなわち春などが三句連続したあと一旦とぎれると、再び春を詠むためにはあいだに七句挟まないと出せない。

同語五句去り 同じ言葉はあいだに五句挟まないと出せない。

同類三句去り 動物（うごきもの）や植物（うえもの）など同じ種類の仲間は三句挟まないと出せない。

このうち同類三句去りは正式の式目では種類によって五句去りになるものもありますが、最初はこれだけを念頭においてやってみてください。

この段階になると、近くに連歌経験者や宗匠をやってくれる人を見つけて指導してもらうこともいいかもしれません。行橋市の連歌大会（福岡県民文化祭協賛事業）では一般の方々の参加を募集していますし、連歌の会を覗いてみるのもいいでしょう。